

購入文化財の概要

【絵画】

1. 紙本著色馬医草紙残闕

1 幅

区分：重要文化財（昭和 14 年 5 月 27 日指定）絵第 217 号

登録美術品（平成 30 年 3 月 27 日登録） 77 号

種別：やまと絵（人物等）

法量：縦 26.2（cm） 横 22.7（cm）

時代：鎌倉時代

馬医草紙は古来有名な伝説的馬医と厩につながれた名馬の姿に、薬草の図を添えた絵入りの秘伝書で、中国から伝来したものに日本の馬医などを加えて伝写されたものである。その原本はすでに失われ、卷子の形状を維持した写本としては文永四年（1287）奥書の東京国立博物館本（重要文化財）が知られる。

本断簡は卷子本の第六図と同じ図様を示す。卷子本の短冊形区画内の文字は「大汝（おおなんじ） 奴婢少女（ぬひのしょうじょ） 名小鳥（ことり）」とあり、断簡本成立の過程で「名」字が脱落したことがわかる。その一方、断簡本の描写は卷子本よりも精緻で、卷子本で本断簡の直前に位置する断簡（重要文化財、東京国立博物館蔵）とあわせ、断簡本の図写年代は卷子本をややさかのぼると考えられる。



【絵画】

2. 絹本著色浄土曼荼羅図（伝僧源信筆）

1幅（1面）

区分：重要文化財（明治32年8月1日指定）絵第446号

種別：仏画（浄土図）

法量：縦85.1（cm） 横114.5（cm）

時代：鎌倉時代

日本では奈良時代末より奈良・當麻寺の国宝「綴織当麻曼荼羅図」が篤く信仰され、とくに鎌倉時代以降これを模したいわゆる当麻曼荼羅が数多く制作され、各地に流布した。本作はその一例である。他例に比して全体的に金彩が極めて少なく、線描主体の表現に特徴がある。確かな筆致による緻密な墨線描写には特筆すべきものがある。また、中央の阿弥陀の面貌は、やや面長で眦が上がり、剛毅さをたたえ、鎌倉時代仏画の特色を見せる。十三世紀にさかのぼる古例として貴重なものである。



【彫刻】

3. もくぞうてんのうりゅうぞう木造天王立像

1 軀

区分：未指定

種別：木造／仏像（天部）

法量：像高 138.2（cm）

時代：平安時代

鍬形付きの兜を被り閉口し、着甲して立つ神将形像で、おっとりと穏やかな忿怒相、各部の浅い彫り口、緩やかな曲線により構成される体の輪郭、控えめな動勢などの特徴に平安時代後期、12世紀前半ないし半ば頃の様式を顕著に示している。図像的には増長天に相当し、また作風・形式とも酷似する多聞天像が米国・シカゴ美術館に所蔵されることから、元来同像と一具でともに四天王像または二天王像の一体であったとみられる。彩色は後補だが鎌倉時代に遡る。当代の大型で堅実な彫技になる保存良好な作例と評価される。



【工芸品】

4. 蒔絵誰袖歌絵硯箱（認定時名称：蒔絵誰袖歌絵硯箱） 一合

区分：重要美術品（昭和17年5月30日認定）

種別：工芸品

法量：縦25.8（cm） 横24.0（cm） 高5.3（cm）

時代：室町時代

蓋表に土坡と梅樹を配し、樹の根元に阿古陀形の大振りの香炉を置いた図を表した硯箱である。方形被蓋造りの端正な造作で、身の中央に収めた下水板には、銅製鍍金の唐草文楕円形水滴と石製硯とを嵌める。総体は地を黒漆として土坡の表現には金研出蒔絵と描割を併用し、梅樹と香炉の身は高蒔絵、文字と香炉の火屋は銀金貝で表す。また、内面は梨地に仕立て、秋野の情景を金研出蒔絵で描いている。

蓋表の梅樹の幹には、「堂（た）・か・袖」の三文字が隠し文字で表されており、本作の意匠が、『古今和歌集』巻一に収められた「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰袖ふれし宿の梅ぞも」の歌意を主題としていることがわかる。これは、判じ絵的な面白さを狙った表現である。また、蓋裏には秋野に佇む鹿の姿を表し、身の下水板にも秋草が配されており、表と裏で春秋の情景を表した情趣に溢れた作品である。



【工芸品】

5. 太刀 銘貞和三年丁亥十月日守吉

防州白崎八幡宮御剣願主源兼胤

一口

区分：重要文化財（昭和2年4月25日指定）工第1509号

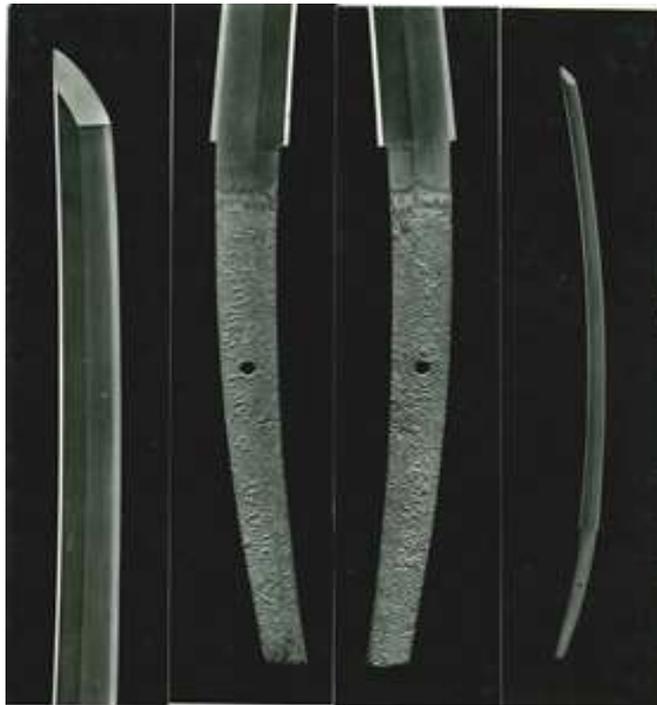
種別：工芸品

法量：刃長83.0（cm）、反り3.34（cm）

時代：南北朝時代

鎬造、庵棟で、腰反りが高く、やや猪首鋒の健全な太刀姿をよく保っている。地鉄の鍛えは小杓目で、中直刃の刃文を焼いて、刃中に小足入り、帽子は、小丸に返る。茎は生ぶで、茎先を栗尻とし、大筋違の鑢目を切り、茎表裏にそれぞれ長銘を切る。

貞和三年（1347）備中青江派の刀工と思われる守吉が、源兼胤の依頼を受けて、防州白崎八幡宮に奉納するために作刀したことが銘文によりわかる。地鉄の優れた出来と深い鉄色に、刃中の働きが豊かな中直刃の刃文を焼いた青江の貴重な遺品である。



【書跡・典籍】

6. 興風集

1 帖

区分：重要文化財（平成 21 年 7 月 10 日）書 2559

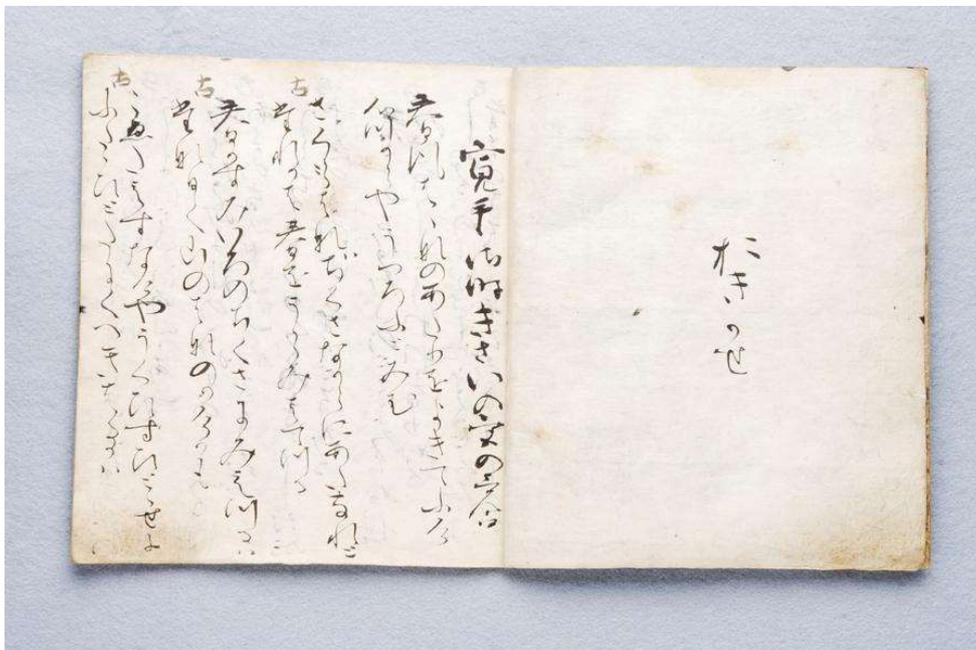
種別：書跡・典籍

法量：縦 16.4 (cm)、横 14.9 (cm)

時代：鎌倉時代

『興風集』は平安時代前中期の歌人、藤原興風（生没年未詳）の歌集である。興風は、紀貫之、凡河内躬恒らと同時代に活躍し、『古今和歌集』等の勅撰和歌集に 38 首入集する歌人として著名である。

本書は双蝶丸萩唐草文唐紙銀箔散原表紙の大和綴装冊子本（二括）で、外題、巻首の一行目は藤原定家（1162～1241）自筆、本文二行目以下は定家監督による写本である。興風の詠じた 52 首を収載し、諸伝本の系統の中では、原本に最も近い写本である。原表紙は、他の定家及びその監督による写本と同じ特徴を備えており、冷泉家旧蔵のものともみられる。



【書跡・典籍】

7. 陸放翁詩集（五山版）

二冊

区分：重要文化財（昭和 34 年 6 月 27 日指定）書 1890

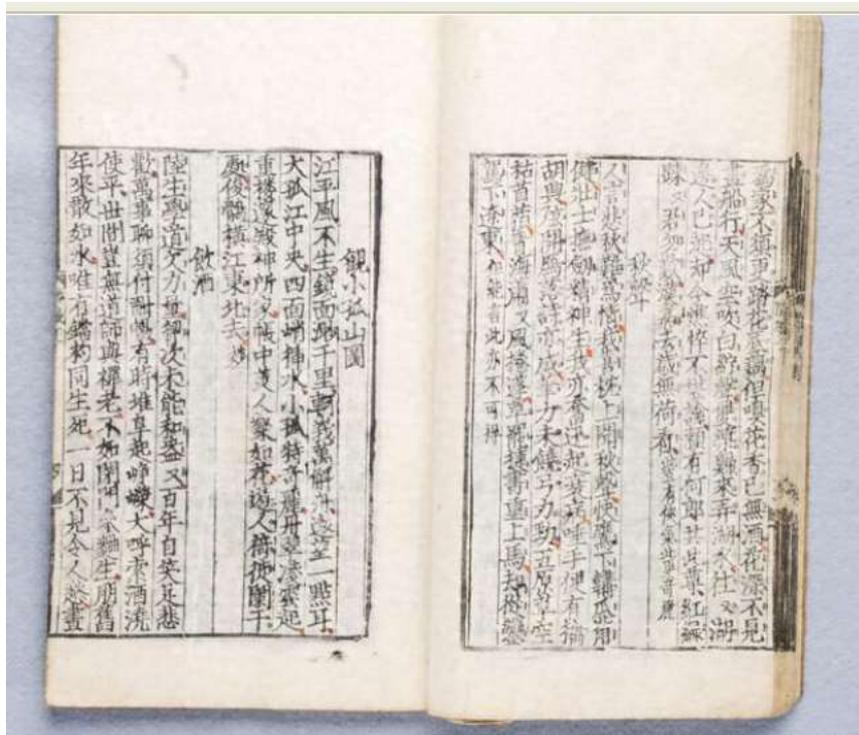
種別：書跡・典籍

法量：各冊 27.0 (cm) × 15.7 (cm)

時代：南北朝時代

『陸放翁詩集』は中国の元代に編まれた最初期の陸游（1125～1210）の詩文集である。羅椅の編纂した前集十巻と、劉辰翁の編纂した後集八巻の二冊からなる。陸游は、生涯を通じて一万首余の漢詩を残した南宋を代表する詩人であり、南宋四大家の一人と称されている。

本書は、元の大徳五年（1301）の跋のある大徳刊本（元刊本）を、京都・鎌倉の五山をはじめとした禅宗寺院等が覆刻して出版した「五山版」の一つである。南北朝時代に刊行されたものであるが、中国には元刊本は残っていないため、『陸放翁詩集』の原型を探るうえで重要である。



【古文書】

8. 明月記〈自筆本／正治元年四、五月〉 一巻

区分：重要文化財（昭和34年6月27日指定）文294

種別：書跡・典籍

法量：縦29.0（cm）×全長366.5（cm）

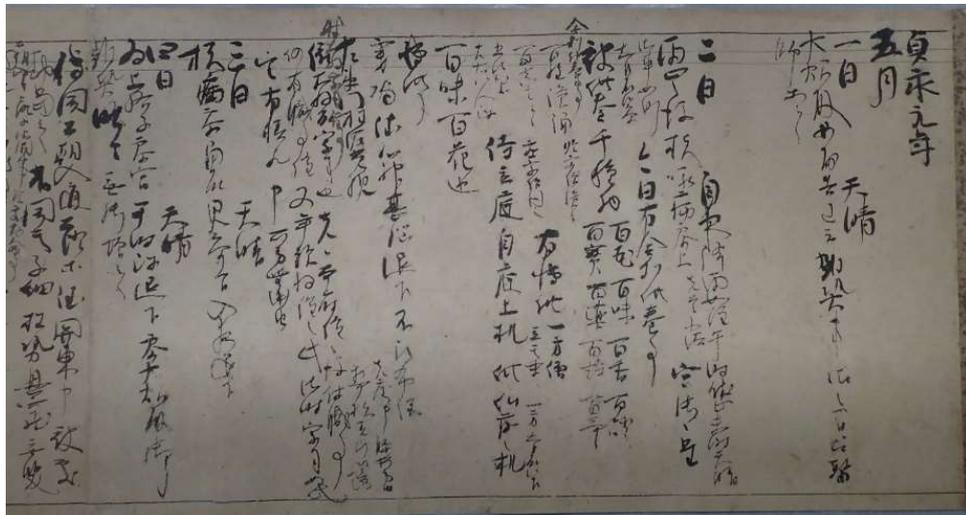
時代：鎌倉時代

『明月記』は藤原定家（1162～1241）が書き継いだ日記であり、治承四年（1180）から嘉禎元年（1235）までの五十六年間分が知られている。定家自筆本は、公益財団法人冷泉家時雨亭文庫に58巻と1幅が伝えられており、平成十二年に国宝指定されている。この他に巷間に流出したものが12件、重要文化財に指定されており、本巻はそのうちのひとつである。

本巻は、巻首に「貞永元年／五月」とあり、全八紙を通じて天三本、地一本の界線が引かれており、一見すると貞永元年（1232）五月一日から三十日の記事にみえる。

しかし、研究の進展により、一から五紙目は正治元年五月一日条から二十二日条まで、六紙目は正治二年十一月十九日条の途中から二十四日条の途中まで、七紙目は建仁元年（1201）五月二十四日条の途中から二十六日条の途中まで、八紙目は正治元年四月二十六日条の途中から三十日条までであることが分かっている。なお、四紙目は料紙を巧みに継いで八行目以降は建保元年（1213）二月二十五日条の一部を挿入してある。また、八紙目には紙背文書がある。

以上のとおり、本巻は連続しない複数の条文を貼り継いであたかも貞永元年五月の記事に見せかけたものではあるが、いずれも定家の『明月記』原本として我が国の歴史上、貴重である。



【工芸技術資料】

9. ^{ひら ゆう き きつ こう かすり}平結城亀甲^{とお おとも}通し男物

1点

作者：本場結城紬技術保持会（外山正美）

制作年：令和3年（2021年）

法量：桁：72 cm、丈：152 cm

備考：工芸技術記録映画「結城紬－本場結城紬技術保持会のわざ－」対象作品

結城紬の^{きつこう}亀甲模様による男物の^{あわせ}裕の着物。結城紬は織幅の中に並ぶ亀甲の数で柄の細かさを表すが、160 亀甲を生地全面に配置した「通し（産地では「ベタ）」と呼ばれる細工^{きつこう}は、難易度が高く手間もかかるため、現在製作できる人が限られる極めて高度な技を駆使して作られたものである。

糸の原料となる真綿は福島県伊達市^{ほぼら}保原産である。真綿^{まわた}から135日かけて糸取りをした後、製織^{せいしょく}の際の糸の毛羽立ちや糸伸びを防ぐため、経糸^{たていと}は3回、緯糸^{よこいと}は1回小麦粉による糊付けを行った。

^{かすり}縞しばり（縞くくり）では、経糸約18,000箇所、緯糸約85,000箇所、計103,000箇所近くを5カ月近くかけて行った。続くたたき染めの工程に耐えるように、一定の間隔、均一な力加減で括るには並外れた集中力が求められ、織りに匹敵する重要な工程であると言えよう。

160 亀甲の通しという、緻密な縞模様を正確に織り出すため、緯糸を一本打込むたびに、柄の出方を確認し、細かい針で修正するという細かな作業を繰り返した。1日に織り進む長さはわずか数センチで、織り上るまでにのべ半年近くを費やした。

実に3年近くの時間をかけて作られた本作は、本場結城紬技術保持会会員による、重要無形文化財「結城紬」の指定要件に沿った、伝統的な技術による作品であり、重要無形文化財「結城紬」の保持団体の技術見本として、伝承者養成事業等の参考となる優秀作品である。また、平成30年～令和3年度工芸技術記録映画「結城紬」の対象作品であり、技術記録の完成作品としても貴重である。

10. 久留米^{くるめ}絣^{かすり}着物^{きもの}「光芒」^{こうぼう}

1点

作者：松枝哲哉

制作年：令和2年（2020年）

法量：丈：182cm、衿：69cm

備考：令和2年第67回日本伝統工芸展文部科学大臣賞受賞作

夜を思わせる深い藍^{ふかい あい}の地に、絣^{かすり}の巧みな表現によって眩い閃光^{せんこう}がはじけて消える様を織り出した。

製作には2カ月以上を費やしたが、中でも、図案作りと絵台^{えだい}による絵糸^{たねいと}（種糸）作りには特に時間をかけ、それぞれ2週間以上を費やした。また、練り上げられた構想を実現すべく、染色工程では阿波藍^{あわ あい}を用い、自然発酵建て^{しぜん はっこう だ}にこだわり、濃紺の部分で90回近くも藍甕^{あいがめ}に浸すなど、理想とする色を目指した。

こうして出来上がった作品は、明るい色の中藍^{なかあい}が扇状に広がり、光を放っているかのような印象を与えている。本作の題の「光」は作家が長らく追い求めたテーマでもある。作家の遺作となったが、その作家活動の集大成に相応しい堂々たる作品であり、令和2年第67回日本伝統工芸展文部科学大臣賞受賞作として高い評価を受けた。



1 1. 久留米絣着尺「4 1立十字白白」

一点

作者：重要無形文化財久留米絣技術保持者会（森山虎雄）

制作年：令和元年（2019年）

法量：幅：39cm、長：1300cm

竹箴たけおさを用いることで、緯糸よこいとの密度の高さに関わらず、全体として柔らかな風合いを保っている。竹尺てくくを手括りの基本とし、絣糸かすりいとと地糸じいとは別の杼ひとする、絣糸に耳印みみじるしをつけない、など男物の絣産地であった久留米絣の伝統的な技術を今に伝える貴重な一作。

1 2. 黄色地破格子文様絣

一点

作者：久米島紬保持団体（桃原禾貞子）

制作年：令和3年（2021年）

法量：幅：37cm、長：1280cm

本作は、沖縄県立博物館が中心となり行った琉球王国文化遺産集積・再興事業での、黄色地破格子文様絣平絹袷衣裳きいろじ やぶれこうしもんようかすりひらぎぬあわせいしょう（第二尚氏時代、18～19世紀）（国宝那覇市歴史博物館蔵）の模造復元事業に、久米島紬保持団体の構成員と伝承者たちが携わったことを契機に生まれた作品である。

琉球王朝時代、王府から久米島へ特別注文された紬織物つむぎおりは「御用布ぐいふ」と呼ばれ、その見本図となる絵図（御絵図）が添付された注文書を送られた。本作の図案もこの御絵図を基にしている。

経糸たていとも緯糸よこいとも、久米島で養蚕した繭からの40日近くかけて手つむぎした紬糸つむぎいとを用い、すべて天然染料で染めた。ウコンは35回、ティカチは30回、蘇芳すおうや藍あいは15回と、何度も何度も重ねることで深みのある色を出すことを目指した。加えて、綜統そうこうの高さを低めに調整したり、糸のテンションを工夫したりしながら、御絵図に合わせて正確に織ることに注意を傾けた結果、おおらかさの中にも整然とした美しさ溢れる織りとなった。

本作は、久米島紬保持団体会員による、重要無形文化財「久米島紬」の指定要件に沿った伝統的な技術による作品である。重要無形文化財「久米島紬」の保持団体の技術見本として、伝承者養成事業等の参考となる優秀作品である。

1 3. 伊勢型紙 突彫 小花入り二道菱格子

一点

作者：伊勢型紙技術保存会（内田勲）

制作年：令和2年（2020年）

法量：紙：天地30cm、幅52cm、彫：天地13.1cm、幅40cm

道具彫による柄を突彫で復刻。参照元の業平菱の、菱の中の十字を小花模様に変えることで、突彫による曲線の表情が生きるように工夫した。菱の角の四ツ目や小花の花芯などの細部の形を揃え、二道（菱を縁取る二本の線）が全体として通るように苦心することで、道具彫の整然とした印象を残しつつ、突彫の柔らかな感じを出すことを心掛けた。

1 4. 伊勢型紙 突彫 白子山子安観音寺（不断桜）

一点

作者：伊勢型紙技術保存会（大杉明）

制作年：令和2年（2020年）

法量：紙：天地29.5cm、幅52cm、彫：天地13.5cm、幅39.7cm

白子の子安観音境内には、冬でも花咲くことから不断桜と呼ばれる桜があり、その木の葉の虫食い跡から同寺の僧が伊勢型紙を創案したとの伝説が残る。花や葉、枝ぶり、さらに竹や霞など多様な柄行きを、それぞれが際立つよう細心の注意をもって彫り分けた。流麗な曲線を多用することで、突彫特有のふっくらとした線の表情が生きている。

1 5. 伊勢型紙 突彫 割付柄に立涌

一点

作者：伊勢型紙技術保存会（木村正明）

制作年：令和2年（2020年）

法量：紙：天地30cm、幅52cm、彫：天地14.7cm、幅40cm

整然と並ぶ割付柄と立涌文様を組み合わせることで、直線と曲線のコントラストの面白さを狙った作品。製作に30日をかけ慎重な彫りに努めた。紙は岐阜県産の和紙を柿渋で加工し、自然枯らしで8年寝かせた生紙を用いている。

1 6. 伊勢型紙 ^{きりぼり} 錐彫 ^{きっこう} 亀甲

一点

作者：伊勢型紙技術保存会（宮原敏明）

制作年：令和2年（2020年）

法量：紙：天地30cm、幅52cm、彫：天地15.5cm、幅40cm

吉祥文様として伊勢型紙でも好まれてきた亀を、幾何学文様として再構成して微細な^{きり}錐で彫り抜いたもの。用いた錐は1種類。それ故、錐の切れ味の冴えには気を配り、また途中で刃の折れがないよう、力の入れ具合にも細心の注意を払って作業することで、全体として整然とした印象を与えることに成功した。

1 7. 伊勢型紙 ^{どうぐぼり} 道具彫～わりもの ^{まえだびし} 前田菱～

一点

作者：伊勢型紙技術保存会（今坂千秋）

制作年：令和2年（2020年）

法量：紙：天地30cm、幅52cm、彫：天地14.5cm、幅40cm

^{きくびし} 菊菱は加賀藩前田家の^{さだめ こもん} 定め小紋。少し丸みを帯びた菱の形に特徴がある。上下と斜めを同じ1本、横1本の2種の道具を用いた。前田菱の柔らかさを表すために、彫る順を、上からまず反時計回りに下まで進み、また上から今度は時計回りで下に降りて、最後に全体バランスを見て下を彫り抜くなど工夫を凝らした。刃は極限まで細く研ぎ上げることで、12枚の花弁ができるだけ近接できるよう気を配った。花の芯（匂い）を少々大きめにとることで菊菱全体が引き締まり、全体としても斜め格子が強調され、道具彫り特有の規則正しさが際立っている。

1 8. 伊勢型紙 道具彫 角通し

一点

作者：伊勢型紙技術保存会（兼子吉生）

制作年：令和2年（2020年）

法量：紙：天地30cm、幅55cm、彫：天地15.3cm、幅40cm

通し柄は小紋三役の一つ。極小の角は、自ら新たに道具を作成して彫刻した。割付け柄のため、小本を地紙に擦り込んで下絵とするのではなく、総臚引きの作業が肝要となるため、彫面の四辺に目印の星目を正確に打つことに集中した。通し柄は少しの乱れでも目立つごまかしのきかない柄故に、下準備、道具作り、彫り、すべての作業において、技術力の高さと注意力の持続が求められる。

1 9. 伊勢型紙 縞彫 縄目

一点

作者：伊勢型紙技術保存会（坂 哲雄）

制作年：令和2年（2020年）

法量：紙：天地31.5cm、幅48cm、彫：天地18.5cm、幅38.5cm

伝統的な柄の縄目を、縞彫で表すことにより、全体としてしなやかさと同時に立体感を表現することを目指した。曲線が多用されたり、彫落とされた部分が多い柄の場合、下絵どおりすべての線を彫り落としてしまうと、型紙として弱くなる。そのため、補強のための吊りを多く残し、糸入れ後に改めて吊りを切り落とす必要がある。一見地味だがこの作業の成否が文様としての滑らかさを左右する。本作では丁寧に、かつ注意深く行った成果が表れている。

2 0. 伊勢型紙 縞彫 木賊

一点

作者：伊勢型紙技術保存会（佐々木正明）

制作年：令和2年（2020年）

法量：紙：天地31cm、幅48cm、彫：天地17.5cm、幅38.5cm

岐阜県産の和紙と柿渋で加工し、8年間乾燥させた自然枯らしの紙に彫刻。生命力あふれる植物として伝統的に人気の高い木賊柄に挑戦した。一寸の中に入る縞の

本数を競う縞柄とはちがって、直線と、時折挿入される曲線の組み合わせの妙が奏でる自然のモチーフの美しさの表現に気を配った。

2 1. 志野茶碗

一点

作者：鈴木 藏

制作年：平成 29 年（2017 年）

法量：縦：11.1cm、横：2.7cm、高：12.5cm

備考：「鈴木藏の志野 造化にしたがひて、四時を友とす」展（令和 3 年、菊池寛実記念智美術館）出品

志野は、ざんぐりとしたもぐさ土に長石釉を合わせることで生まれるぼつてりと柔かい白色とともに、土中の鉄分の発色による鮮やかな緋色が魅力とされる焼物である。岐阜県の土岐市、可児市を中心とした地域で桃山時代から江戸時代初期にかけて興隆し、その後技術が途絶えたものの、昭和初期になると陶芸家や学者、愛好家らによって研究、再評価が進み、復興された。同人は、郷里・土岐市のやきものである志野の技を極め、高度な技術と創造力をもって優れた作品を発表し、日本伝統工芸展を含む数々の公募展で賞を重ね高い評価を得てきた。

同人の志野は、独自の改良を加えたガス窯による焼成や釉薬試験の成果など現代的な試みを導入しつつも、桃山の志野の美を捉えて離さず、更に多彩な装飾表現、釉調・土味を活かした量感あふれる力強い表現力を特色とする。

本作品は、タタラ作り（板造り）で背の高い深筒型に造形され、胴部を縦方向に 9 面に面取りした。灰色の中に強く緋色が混じる変化に富んだ調子が力に溢れている。



22. なが いたちゅうがた あさ じ き じゃく がましまはぎもん 長板中形麻地着尺 蒲縞萩文

一点

作者：松原伸生

制作年：令和2年（2020年）

法量：幅：38cm、長：1250cm

備考：令和2年第67回日本伝統工芸展日本工芸会保持者賞受賞作

蒲の穂に萩の枝やつぼみが揺れ、画面にリズムと動きを与えている。縦の線と横の曲線が絡み合い、文様としての美しさだけでなく交差部分が型紙における吊りの役目も果たす巧妙な柄の配置が光る。

作者は、型紙の選定から、気候や文様に合わせた糊づくりに、生地の下拵え、糊置き、さらに、その後の呉入れ、藍染に至るまでのすべての工程を一人で手掛ける。

それ故、糊置き、染色双方の工程において工夫を凝らしている。例えば、極薄の麻の生地の両面に正確に糊置きできるよう、長板に生地を地張りした後、炒り糠を撒いて布目の隙間を塞ぐことで、型が表と裏でずれることを防いでいる。また、染め抜かれた白場の多い柄は糊面積も多くかなりの重量となるが、その後の呉入れや藍染の際に、防染糊が崩れたり生地が擦れたりしないよう細心の注意を払うことで、長板中形の魅力ともいえるくっきりとした仕上りを可能とした。

本作では、長板中形の魅力とも言える、藍と白場の対比のバランスが絶妙の柄に、麻布の透け感とも相まって、単衣の衣としての清涼さが表現されている。令和2年第67回日本伝統工芸展日本工芸会保持者賞受賞作に相応しい一作である。



【アイヌ文化関係資料】

23. アイヌ文化関係民族資料

アイヌの民具資料等 計 33 件 39 点

区分：未指定

時代：19～20 世紀

個人や古美術商を通じて収集されたコレクションである。刺繍など、研究価値・工芸的価値の高い資料が含まれる。また、アイヌ文化伝承の様子について、高い展示効果を持つ可能性がある民具も含まれている。

○民具資料 アットウシ（樹皮衣）は、オヒョウやシナノキなどの内皮からとった繊維で作った反物を着物に仕立て、文様を入れた衣服であり、儀礼の際などに着る晴れ着である。

この衣服の襟や袖、袖口の作り方や文様については、樺太アイヌの技法と思われる。素材は樹皮で、裾などの端は木綿をテープ状にして縫っている。また袖口と衿、胸元は別珍の上にチェーンステッチにて文様を施し、裾の文様は置き布をせず刺繍のみである。



アットウシ（樹皮衣）表側



アットウシ（樹皮衣）裏側

24. アイヌ文化関係文書資料

文書資料 6件6点

区分：未指定

時代：18～20 世紀

古美術商等を通じて収集されたコレクションである。当該期のアイヌの歴史を考えるうえで参考となる文書である。

○『松前西岸続村名北門私議』（1855年）

「松前ヨ〔ママ〕西岸続村名」として北海道日本海およびオホーツク海沿岸（西蝦夷地）の諸地名 88、「東岸続村名」として北海道太平洋沿岸、クナシリ、エトロフ（東蝦夷地）の諸地名 120、「カラフト南の方村名」として樺太南部（北蝦夷地）の諸地名 82、が列挙されている。

「北門私議」は、横井豊山「嘉永7年堀織部に随い蝦夷地を視察した豊前藩士の筆者が、蝦夷地開発の急務とその方策をのべたもの」（北海道大学附属図書館『日本北辺関係旧記目録』）とあることから、その写しと推測される。

「乙卯蒲月中浣」とあり1855（安政2）年旧暦5月中旬の年紀があり、「塩谷世弘妄評」と書かれていることから、昌平黌に学んだ儒学者の塩谷世弘（宕陰、1809～1867）の書評がついている。

